

# 館山支部だより Vol.120

<支部連絡窓口>  
千葉県隊友会館山支部  
事務局(代表)川村 巖  
〒294-0032 館山市笠名1357  
TEL 0470-22-0230



「ピワの小花」  
年間一番花の少ない正月に  
かけて白い小花を咲かせるピワ  
<拙宅の庭先にて>

暦ではすでに立春、改めて新春のお慶びを申し上げます。  
元旦早々能登半島一帯を襲った大地震は、被害の全容が明らかになるにつけ改めてその甚大さに思い知らされるどころです。  
現地では諸団体とともに在葉の木更津陸自第1ヘリ団と松戸  
需品学校から多くの隊員が災害派遣に従事、厳しい条件下で  
懸命な捜索活動、復旧作業等が続けられています。  
一日も早い状況の好転を祈念してやみません。

<館山支部長 川村 巖>

## 支部の活動概要

### 《12・1月の活動実績》

- 1.11(木) 21AW群司令への年頭表敬挨拶  
(OB関係三団体代表)
- 1.27(土) 1月支部役員会(コミセン、別法)

### 《2・3月の活動予定》

- 2.26(月) 防災備蓄倉庫払出訓練研修(安房地区防災倉庫)
- 3..16(土) 県隊友会後期支部長会議(千葉市民会館)
- 3.20(水) 館山市戦没者慰霊祭(鶴ヶ谷八幡宮)
- 3..30(土) 年度末支部役員会(コミセン)

## 県隊友会が重視する「地域社会への貢献」について

県隊友会が事業活動の重要な柱として力を注いでいる「地域社会への貢献」の一つとして、千葉県との協定に基づく「防災備蓄品の出庫作業等協力」が挙げられ、目下、支部として県関係機関と調整中ですが、近々予定されている備蓄品の払出訓練の研修(見学)を通じて、支部としての協力支援のあり方、体制等について検討することにしております。  
なお、次ぎ挙げる「災害情報協力員制度」及び「災害復興支援ボランティア制度」も、災害が絡んだ地域社会に対する協力作業の一つとして取り組んでいるもので、以前にも取り上げたことがあります改めて概要を紹介しておきます。

### 「災害情報協力員制度」

東日本大震災を機に県隊友会が陸自空挺団(千葉県自衛隊災害隊区長)との間で取り交わした協定(覚書)に基づき、大災害発生時に情報協力員がそれぞれの地域で「知り得た情報」を、速やかに自衛隊に対して提供(報告)することにより、災害派遣活動の円滑化に寄与することを目的としたものです。災害発生時の初動における情報不足、混乱、錯綜等の解消に寄与できることを期待しております。

このため館山支部では現在5名の会員が情報協力員として指定されています。

### 「災害復興支援ボランティア制度」

これも東日本大震災を機に、県隊友会が自主的に立ち上げた復興支援ボランティア制度ですが、東日本の災害復興支援はじめ旭地方の津波災害、近年では常総地方の河川洪水氾濫災害時に県隊友会の各支部から参加者を募って復興支援作業に従事しております。

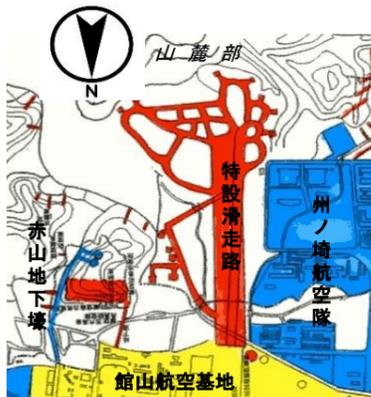
なお、県隊友会では「ボランティアチーム(当初50名)」を編成しておりますが、メンバーの高齢化もあり、その都度参加者を募って事態に対応するようになっております。

<支部長>

## 令和6年度会費の納入について

県隊友会にとってかけがえのない会務運営の資金源となる会費等の納入の時期になりました。令和6年度の年会費の納入について、また終身会員には会運営協力費の寄付をお願いしておりますので、同封の振込書により3月末までの納入についてご理解ご協力のほどよろしくお願い致します。

<支部事務局>



<館山基地戦備施設計画(抜粋)>  
終戦時大半が焼却処分された旧軍文書・記録資料の中で奇跡的に残っている館山基地の戦備施設計画図で、戦争末期の施設計画を知る上で極めて希少な資料と言えます。  
原図の南北を反転させ、特設滑走路及び誘導路を示すと図(赤)のようになる。なお図の上側の山の麓付近には誘導路に直結して 航空機格納用の地下壕が数箇所計画されていた。<筆者注>

## 「趣味転じて実用へ！ ベランダに変身したウッドデッキ」

(もう30年以上前のことですが)自衛隊勤務を終えて民間企業に就職することになりました。防衛とはおおよそ関係の無い損保会社でしたが、毎年「自分の勤務評定」を行って提出させられたり、新しい科長が着任するや前任者のやり方をガリと変え、それまでの業績や作り上げた成果物を全部破棄してしまったり、かと思うと新入社員が上司の部課長を「(なれなれしく)「〇〇さん」付けて読んだり、勤務の体制とか態様、社風等々、異文化に接したようでカルチャーショックを受けたことは確かです。

「人生は一つしかない」、第二の人生を否定する人も居るようですが、私にとって初めて経験した会社勤務は「第二の人生」と呼ぶに相応しいものだったと思っております。そして、通算40年以上に及んだ通勤・給与生活から解放され、晴耕雨読の生活に入っただけで20年以上経ちますが、勝手気ままな人生、何ものにも束縛されることのない「第三の人生」を精一杯楽しみ、充実させたいというのが夢でした。

### 苦節半年、ウッドデッキの設計から完成まで

日曜大工と言われるのが癪であえて「DIY・Do It Yourself」で通しておりますが、最初に手掛けたDIYを概略披露することにします。材料探しのため君津のカインズに度々足を運び、届けられた2トントラック満載の材木を目にした時は果たして全部使いきれぬのかなという不安にかられたり、土台の生コン延ばしにギブアップしたくなるようなこともありました。材料の切り出しから3回重ねの防腐塗装と乾燥作業、工具はインパクトドライバーのみ、6か月を費やして床面積5坪のデッキが完成した時の感激はひとしおでした。重量級の関取が何人か遊びにきてビックともしない頑丈な構造、野暮つたい屋根など取付ずパーゴラ風の洒落たデザイン、リビングの延長として自然を身近に感じ、「夕涼みジョッキ片手にバードウォッチング」などの駄句が自然と飛出すような雰囲気でした。

ところが3年ほど経ち、大型台風にも耐えたデッキでしたが、木材があちこち腐り始めたのにはガッカリさせられました。湿気の多い日本の気候風土には向かなかったのでしょう。結局、腐った材料を撤去して当初の三分の一程度に縮小し、屋根にポリカボードを張りめぐらした結果、何の変哲もないベランダになってしまったのです。現在は家内の鉢置き場として占領され、夢見たテキサスやカンサスなどの野生的な生活も潰え、現実の世界に引き戻されたような感じです。

当初頭に描いていた第2、第3の事業は残念ながらまだ手付かずのままですが、目下腐心しているのは「身辺整理」なのです。今までに何回か手がけたにもかかわらず納得するところまでゆかないのです。広辞苑では身辺整理とは「後々面倒な問題が生じないように身の回り品を処分したり、懸案の事柄に結末を付けたりすること」と定義されてます。広辞苑の定義ははともかく、やはり現実問題の処理、納得のゆく身辺整理を当面の事業として最優先させる所存です。

## どちらに向かって離陸するの？ 戦備計画に見る館山基地の特設滑走路

県道洲崎線の宮城の郷前から自動車学校に至る数百mの直線道路は、当時(終戦直後)造られた道路としては珍しく幅の広い道路と言えよう。この道路は、かつてこの付近に建設された全長(南北方向)700m、幅100mの館山航空基地の「特設滑走路」の一部(西側部分)にほかならないのである。

この特設滑走路は結局は使用されることなく終戦を迎えたが、この滑走路を巡って、どちらの方向に飛ばす(離陸させる)の？という疑問がある。風向に逆らって離陸させるというのが通念であろうが、「山側に向かって飛ばす」と考えている人が多いようである。基地の格納庫から搬出した飛行機をそのままこの滑走路から離陸させることができる、というのが理由のようである。ところがこの滑走路の南端(エンド)から3~400m先には標高70~90mの小山が立ちはだかっており、さらにこの滑走路は南にJ向かって100分の1程度の昇り勾配になっている。海軍の滑走路建築基準では昇り勾配の限度であったが、これは意図的に設計したのではなく、(工事の労力軽減の上で)当時の現場の地形を極力そのまま利用したものにはほかならないのである。

燃料・弾薬満載に近い状態での出撃に際して、当時のゼロ戦の能力(余剰馬力)でもって「山越え」が可能であったのであろうか。まして目の前の山を避けるために、上昇左急旋回で西側の山の切れ目(谷間)を通り抜けるという劇画もどきの操縦ができたのだろうか、答えは「NO」であろう。また逆の発想で、滑走路の南端まで機体を運んで(当時は戦闘機と言えども整備兵が手押しで移動させていた)北に向けて飛ばした。わざわざ手間をかけて何のために？、等々他愛のない問答で結論を見出せないが、この問題を専門的な見地から解決の糸口を探ってみることにする。

### 「館山航空基地次期戦備施設計画(左図)」に解決のカギを探る

この次期戦備施設計画が策定された時期については戦争末期という説が大半であるが、以前にも紹介したように昭和18年8月に「海軍建築部令」の改定が帝国議会で承認されている。法令の改定は施設関係者の悲願であり、航空機掩体や地下壕等の「築城施設」の建設を推進する上で必要不可欠の要件であった。この計画図は築城施設建築の具体的な計画を示すものにほかならない。言い換えれば改定と並行して、否改定に先立って作られていたと考えるのが道理であろう。

この特設滑走路を含めた築城施設計画は、想定される空襲の激化とともに、それまでの館山航空基地の地上施設の機能の大半が失われるであろうという想定で、最後の航空作戦をこの特設滑走路・誘導路及びそれに通じる地下航空機格納壕、そして赤山の戦闘指揮所(地下壕)に託したものであろう。 戦闘指揮所についても作戦通信・指揮のほか、3階部分には特設滑走路や誘導路の状況を一望できる場所が設けられており、離発着の管制を行う意図であったのであろう。 灌木類の繁茂により現在は地元の人すら格納壕(工事跡)の所在を確認できないが、図の山の麓付近には計8カ所の格納壕の工事跡(未完成)がかつては確認できた。 なおこの誘導路は新しく作ったものと言うよりは、地形やそれまでの村道等を巧みに利用して作られたものであろう。

最後に本題の「どの方向に飛ばすの？」については、言わずもがな「山麓の格納壕」から搬出した航空機を誘導路を経て滑走路から北へ向けて離陸させる」ことを意図したものであろう。それぞれの地下格納壕には5~6機の小型機を収納するよう計画されていたと言われる。

《自称地域史探索マニア その43》